

# 現象と自由 (一)

——カント二元論と美の問題——

川村 三千雄

(一)

カント哲学において美(芸術)の問題は周知のように彼の「判断力批判」(Die Kritik der Urteilskraft)の前半に論じられている。ここで彼が明らかにしようとしている問題を理解するためには——一般に言われていることに属するが——二つの観点からとらえることが有効であるように思われる。第一の観点は美学の問題史的視点に立つてその史的系譜を跡付けようとするものであり、第二にはカント自身の体系のうちに内在的にその位置を明らかにしようとするものである。

第一の方向はカント美学をいわゆる独逸観念論哲学の中に位置付けようとするものに外ならない。即ち独逸観念論哲学はバウムガルテンに出發し、カントはそれに体系的基礎を与えるという重要な役割を果たしたのである。このカントの方向は更にシラー、シェリング、シュopenハウエル、シュライエルマッヘル、ズルツェ等を経てヘーゲルに通じていくと考えられるのである。この意味において独逸観念論の古典美学はカントに始まりヘーゲルに完成されるということも出来るであろう。そのことは独逸観念論哲学はカントによって基礎が置かれヘーゲルによって頂点に到達

現象と自由 (一)

することと相即するとも言えよう。いい換えれば、独逸観念論の哲学は理性を基礎とする体系的総合的哲学であって、ここでは美の問題も孤立的個別的に追究されるのではなく、他の領域、他の対象との全体的聯関の中にとり上げられたということの意味するのである。

このような美の問題のあり方は、カント哲学体系の中にあっても上にあげた第二の観点に直ちにつながって来るのである。即ちカント哲学の中に於いても美学は決して孤立的個別的領域ではなく全体的に他の部門と有機的につながって体系的全体の一環をなしているということである。

このような二つの観点を足場としてカントの美の問題を考察してみよう。

カントの哲学の全体的性格に関してヘーゲルは次のように言っている。「道德性の見地はカント哲学の中で最高の立場としてあらわれ、且つ推しすすめられている。カント哲学はこの立場を本質的な意識にまでもたらしたが、本来的には対立に止まったのである。和解されなければならない対立はここでは偶然的要求として妥当し、しかも真理なるものの究極的理性自体として妥当するのではない。かつ自由と必然との調和、普遍と特殊との調和はただ我々に表象されたものとして妥当し、現実的真理として妥当するのではない」。(Hegel: Werke I S. 84) この叙述は正しくヘーゲル的であり、彼はカント哲学全体を対立と和解との聯関として見ようとする。しかもカントの体系にあっては対立と和解とは必然的ではなく偶然的であり、現実的ではなく単に形式的表象的であると評するのである。

ヘーゲルも指摘しているようにカントの体系では道德的領域はその最高の次元として示されているのであり、カントはこのことを「実践理性の優位」(Primat der praktischen Vernunft)として表わしている。ここにカント哲学の内容的な特性が見い出されるのであるが、いま形式的側面について考えるならば、理論理性に対する実践理性の優

位という規定は一応両者の序列的関連を示しているのみであるという外はない。従って両者が内容的に媒介統一されているのではないということになる。いいかえれば両者は領域的に且つ能力的に区別されているのみであり、両者の関係は何としても並列的区別、次元差別の方向に把えられているという外はない。この意味に於いてはヘーゲルの言うように対立に止まったということにもなるであろう。別の言い方をするならば、カントの哲学は全体的にみて二元的構造を持っており、ここにヘーゲルの批判が向けられていると解することも出来るであろう。悟性と感性、自由と必然（自由の因果と機械的因果律）叡知界と感性界、現象と物自体、道德性と幸福論の夫々一對の概念はいずれもカント哲学の根本性格である二元的構造を示しているものと考えることが出来るであろう。ヘーゲルはこのような二元的対立を止揚しようとするのであり、それは精神の弁証法的運動の過程の中に把えられる。この過程の中において両極は全体として調和統一され、そこにはじめて現実的真理が到達されることがえられるのである。ヘーゲルをもって言わせればカントは根本的に二元的構造の上に立つ限り、調和、統一は試みられたにせよ、それは偶然的であり、単なる表象に止まり従って現実的真理にまで到達し得ないということになる。

それではこのような批判は如何なる意味を持つのであろうか。またカントの試みた二元的構造の和解統一はどのようなものであるか。ここにカントの第三の領域即ち美（芸術）の問題が現われて来るのである。

カント美学の歴史的意義を一言にして言うならば、カント以来の觀念論美学が古典美学の *Synthesis*（綜合）と見られるとすれば、カント美学はそれに対する *Antithesis*（反定立）の役割を荷うものと言うことが出来よう。この場合 *Thesis*（定立）に当たるものはカント以前の美学、特にバウムガルテン等を指していると考えていいであろう。

(Helmut Kuhn: *Die Vollendung der klassischen deutschen Ästhetik durch Hegel* S. 23 参照) このカント美学

の歴史的言葉を理解するためにはどうしてもカント哲学の根本構造を概観して置かなければならないように思う。

先ずカントの先驗的觀念論の主要な目標の一つは経験の基礎付けということである。この課題に対しては従来の合理的形而上学の空虚な形式的原理はその無力を曝露せざるを得なかった。他方経験論も経験の論理的普遍性を証明することは出来なかったのであり、ヒュームの懷疑論に終るより外はなかったのである。カントはこれ等の合理論と経験論とを綜合し——ここに啓蒙哲学を超える独逸觀念論の基礎が置かれたのであるが——経験成立の根源を認識主観に求めたのである。この認識主観は先驗的統覚の統一の下に経験を一定の秩序連関の中に組み入れる。このような綜合的形式は総ての妥当な認識の源泉とみなされるのであるが、更に感性の先驗的形式の体系（純粹直観形式即ち時間と空間）及び悟性の先驗的形式（純粹悟性概念即ち範疇）として規定される。従って認識の可能の限界が設定されることになり、悟性の規定は直観形式により与えられる現象にのみ関わりそれを超える物自体は認識より除外されることになる。

物自体の概念はカント哲学の極めて特徴的なものであり、多くの論議を引き起したものであり、且つ困難な問題を含んでいるのであるが、ここではそれに触れない。しかし兎も角、現象と物自体及び認識主観と物自体との関係が説明されなければならない。カントはこの関係を触発される (affizieren) という表現を使用する。このことは悟性の能動的作用（それはまた自発性 Spontanität である）に対して感性的素材が所与 das Gegebene として与えられるという受動的作用が附加されることになる。ここにコーヘンが論理的に徹底しようとする新カント派の根本問題があるが、それは兎も角として、超感性的基体としての物自体によって受動的に触発されるという限りに於いて我々の認識の自発性は有限的であって絶対的自発性ではない。このようなカントの認識論の構造の中には明らかに形式と素

材、悟性と感性、能動的自発性と受動的受容性等の二元的対立が見出されるのである。

物自体の概念は周知のようにカント解釈の上に種々の異論をひき起したものであるが、それが如何に触積されるにせよ、少なくともカントの立場に立つ限り排除し去ることは出来ないであろう。カント哲学の根本的性格の一つを示す思想と考えられるからである。物自体の可認識性が否定され、単に感性的素材の所与性が示される限り認識作用については何等の積極的意味も持つことは出来ない。高々消極的な限界概念ということに止まる外はない。このような考え方は或いは論理的不徹底ともいえようし、従って新カント派の如くこれを排除しようとする方向も出て来る。然しそれは少なくともカントを超える立場に外ならない。我々は兎も角、物自体の概念をカント哲学の根本性格を示すものとして彼の立場に立ち、ここに見出される二元的対立の問題を追っていくことにする。

カントは勿論、二元的対立の立場に止まろうとするのではない。ここにもカント方法の特徴が見出されるのであるが、それはこの対立を彼は内面より統一しようとするのではなく、第三の立場若しくは中間項を設立して対立の両極をつなぐという方法に外ならない。この方法が典型的に、しかも体系全体に関して見出されるのが即ちカントの美の問題であろう。美は彼に於いては自然と自由の対立の統一として把えられているからである。

自由と自然との二極的概念の体系的構造は「判断力批判」の序論の中に明らかに示されている。自然は理論哲学的概念であり、先天的原理による理論的認識が可能である。これに対して自由は実践哲学の中心概念であって先天的な意志規定の原理である。従って、哲学は原理の上から全く異なっている二つの領域、即ち理論哲学と実践哲学（道徳哲学）の二つに区別されることになる。自然概念による立法は悟性を通じて行なわれそれは理論的である。自由概念による立法は理性の側から行なわれ単に実践的である。即ち、実践的なものにおいてのみ理性は積極的意味で立法的で

あり得る。自然の理論的認識に関しては理性は悟性を介して法則を告知するもの *Als Gesetzkündig, vermittels des Verstandes* (K. d. Urteilstkraft Einleitung § 24) としての機能を有し、しかもその帰結については自然の限界内に留まらなければならない。「悟性と理性とは、従って、経験の同一の地盤の上において相異なる立法をもち、一方は他方を侵害することはない。何となれば自然概念は自由概念による立法に影響しないと同様に自由概念も亦自然の立法をみだし妨げることはないからである」。(K. d. Urteilstkraft: Einleitung S. 24) ここで言われていることは悟性と理性、自然概念と自由概念とは夫々全く異なった領域(対象)で立法的であって両者の間には何の関連もなく且つ互に影響し合うこともない。二つの能力、二つの原理、二つの領域は全く独立的または孤立的である。カント自らの表現によれば(Ebenda.)自然概念はその対象を直観の形でもつのであるが、そのことは対象は物自体ではなくてあくまで現象であるということである。それに対して自由概念は物自体(叡知的基体としての道德的人格)をその客体とするのであるが、それはもはや直観的に表象され得るものではない。しかしながら一般に理論的認識の場合には対象は直観の形で把えられなければならない。従って直観に与えられない物自体の理論的認識は不可能となるわけではない。ここでは自由概念は現象の背後にのる超感性基体である物自体にかかわるのであるから、現象と自由とは全く関連はない。即ち、自由概念は現象にかかわりのない叡知界に属し、従って、現象の中には全然自由はないということになる。

しかしこのような二極の孤立的乖離は哲学の体系的全体的要求を満足せしめるものではない。カントはこれに対してどのような考えるであろうか。彼は先ずこれ等の二つのものの対立は絶対的な乖離に留まるべきではなく相互に関連すべきものであるとして次の如く言う。「恰も前者が後者に対して如何なる影響ももち得ないかのよう、前者

(自然概念の感性的領域) から後者 (自由概念の超感性的領域) への移行は不可能である。しかし後者は前者に対して影響をもつべきである。(So soll doch diese auf jene einen Einfluss haben.) 即ち、自由概念は自由の法則によって与えられた目的を感性感性界において実現すべきであり、従って、自然はまた自然の形式の合法則性が少なくとも自然の中において自由の法則に従って成就されるべき目的の可能性と合致するように思惟されなければならない」。(K. d. U. S. 26) 自由はその目的とするところを感性感性界に実現すべきであり、他方、自然の根底には自由によって規定されるような目的の可能性がなければならないというわけである。ここにはじめて「合目的性」の概念が導入される。この概念によって自由概念と自然概念との調和、結合が企図されるのである。

このようにして、カントの哲学は根本的性格として二元的対立という基盤の上に立ち、しかも対立の二極は直接的につながりをもっていない。カントの努力はむしろ両者の原理的峻別に向けられているように思われる。それにもかかわらずこの二極的対立の総合は人間理性の根源的要請でもあり、且つまた全体的であろうとする哲学の体系的要求でもあろう。そのことをカントは先ず当為 *Sollen* としてまた可能性 *Möglichkeit* として提起したものと考えることが出来るであらう。それでは彼の合目的性の概念は如何なる能力に関わり如何にして二元的対立の和解統一の役割を果たすのであろうか。

## (二)

カントは人間の上位認識能力に属しているものとして悟性と理性とを挙げ、その中間に「判断力」を想定する。他方においてこれと対応して能力の側面より人間の一切の精神能力を三つの能力に区別し、これ等は共通の根源には還

元できないものであると考える。即ち認識能力、快不快の感情の能力及び欲求能力がそれである。第一のものは理論的認識の能力であつて自然に關係する場合には悟性が立法者の役割を果たし、第三については自由概念に従う能力として理性が先天的な立法者である。これ等の認識能力（悟性）と欲求能力（理性）の間に快、不快の感情能力としての判断力がおかれることになる。しかも判断力はその論理的使用について悟性から理性への移行を可能にすると共に自然の領域から自由の領域へのつながりの可能性が想定されるのである。

しかしこのような両領域の移行連関はなお形式的、抽象的であるといわざるを得ないように思う。何故かということ。カントの方法は能力の分析ということを手がかりとしている。従つて内容的にはまだ無規定的であり且つまた諸能力と対応領域との完全な結合も示されていない。しかも悟性と理性との両極の中間頃としての判断力についてみても、中間頃は両者に対して必然的であるというよりはむしろあとから偶然的に挿入されたという感がある。或いはまた二極の統一に関しては附加的に要請として設定されたというように考えられるであろう。それは兎も角として判断力は如何なる先天的原理を含み、如何なる機能をもつものであらうか。

カントによれば「判断力というのは、一般に、特殊的なものを普遍的なものの中に含まれたものとして思惟する能力である」（K.d.U.S.30）この判断力には二つの種類があり、一は規定的判断力の他の一つは反省的判断力である。前者は普遍が与えられていて特殊がそれに包摂される場合の判断力である。それに対して後者の場合には与えられているのは特殊だけであり、しかもその特殊に対して判断が求められるというのである。前者の規定的判断力とはもっぱら包摂的であるから、自然の中に見い出される特殊的なものを普遍的なものに下屬させるという機能をもつ。従つてこの際判断力は自己自らの法則を思惟するという必要はおこつて来ない。これに反して、自然の中で特殊

のみが与えられていて、それからそれを包摂すべき普遍を見出していこうとすれば、反省的判断力は経験からは導き出すことのできない一つの先天的原理を必要としてくるのである。このような先天的原理が即ち自然の合目的性の概念に外ならないのである。カントによれば、合目的性の概念は自然概念でもなく、また自由概念に関係のあるものでもない。何故かという合目的性の概念はそれ自体によっては何物も自然に附加するものではない。ただ自然に關する反省に際して如何なる手続きを探るべきかという様式を表象するものであり、いわば判断力の主観原理（格率 *Maxime*）にすぎないからである。しかも主観的な反省の原理という限りまた自由の概念とは何等のかかわりもないことになるであらう。

ところでこの合目的性の概念は一方においては客観的に理解されること、いいかえれば概念を通じて対象自体に關係づけられることによって自然の目的論となる。他方においては合目的性が概念を介することなく、即ちある規定的概念への対象が合致するというのではなくて、対象の我々の概念能力一般に合致するという仕方であらう。美の領域にかかわってくることになる。このようにして自然美は形式的主観的合目的性の概念の表出とみなされ、それに対して自然目的は実質的（客観的）合目的性の概念の実現とみられるのである。前者は趣味により快の感情を媒介として直観的に判定され、後者は悟性と理性により概念に従い論理的に判定されるということになる。従って「判断力の批判」は美的判断力（直感的）と目的論的判断力の二つに區別され、一方は形式的合目的性（主観的合目的性）を快、不快の感情により判定する能力にかかわる。他方は自然の実質的（客観的）合目的性を悟性と理性とによって判定する能力を意味するのである。

ところでカントは前にあげた二つの判断力に関して次のように主張する。自然について反省する場合、その反省の

根拠として全く先天的な原理を含むのはただ美的判断力だけであるというのである。これに対して自然の目的論的判断には全く先天的原理を含んでいないというのである。即ち、美的判断力は事物を概念に従ってではないが、ある規則に従って判定する特殊な能力であるが、目的論的判断力は特殊な能力ではなく、一般の理論的認識の場合と同じように概念に従ってすすめられる反省的判断力一般に過ぎないと考えられるのである。従って美的（直感的）判断力の批判ということが彼の「判断力批判」の本質的部門を構成するといっているのである。

このようにして判断力に関する形式的合目的性の先天的概念が確立され、同時に「判断力批判」の主要目標（美的判断力の批判）が設定されたのである。しかもそれは同時に体系的構成の上からみて悟性の立法と理性の立法とを統一結合しようとする目的をもつものに外ならない。即ち、先天的な悟性の立法による自然の領域と理性の立法に基づく自由の領域とを媒介しようという意図をもつものである。純粹理論理性から純粹実践理性へ、或いは前者の合法則性から後者の究極目的への移行関連が合目的性の概念によって可能であると想定されるのである。カントの言によれば、この自然の合目的性の概念によってはじめて自然の法則と調和的に実現される究極目的の可能性の認識されるのである。「判断力批判」の序論の最後には次の表が見い出される。

特殊の全能力	認識能力	先天的原理	それが適用されるもの
認識能力	悟性	合法則性	自然
快、不快の感情	判断力	合目的性	芸術
欲求能力	理性	究極目的	自由

(三)

以上はカントの「判断力批判」の序論によって彼の意図するところを概観したのであるが、この構想に対しては先に引用したヘーゲルの批判が一つの重要な観点を与えるであろう。

序論の中で示されているように「判断力批判」は自然概念と目的概念の二つのものの綜合を意図している。この綜合の方法について特徴的であることは——前に示したように——内容的観点より試みられるのではなく、むしろ、極めて顕著に純粹に方法的形式的観点よりなされているということである。このことは屢々指摘されるように、批判哲学の全体に共通である性格と考えることが出来るであろう。前掲の表を一見しても知られるように、彼は先ず自然、自由を方法的に定立し、それを可能にする根拠として夫々に固有な人間の精神能力をおく。従って先驗哲学は人間の能力の分析による先驗的原理の確立という本質的性格をもっている。人間の能力はそれ自体内在的であり形式的である。従って直接にアプリオリな形式的原理の確立に結び付き得る。先驗哲学の根本性格は既にここに決められていると思われるのである。このような人間の諸能力に対応して諸概念及び諸領域の区別がなされる。従ってこの場合、諸能力に対応する領域は能力から演繹されるのであり、その結果、第二次的な意味をもつだけになってしまう。言い換えれば、具体的内容若しくは個々の領域は能力によって打ち立てられた原理のいわば適用に外ならないということになる。しかもそれに伴って、素材である具体的実質的な自然、芸術、道德をその内容に即して充分に規定することは困難を含むということも起って来るであろう。それはここでは問題の外におくこととして三つの能力の如何なる関係にあるかをカントに即して考察してみよう。

先ず第一に認識能力である悟性と欲求能力である理性とはどのようにして判断力によって結合されるのであろうか。これについてカントは次のように説明している。即ち美的判断は概念の能力としての悟性から導かれるのでもなく、また、感覚的直観から導き出されるのでもない。悟性と想像力 *Einbildungskraft* 即ち自由な遊戯によって生ずる。この能力の一般的対象は主観の快、不快または満足の感情に関わらしめられるのである。即ち「この快の感情はその根拠 *Grund* を認識能力の調和の中にもっている」。(K. d. U. S. 80) 従ってまた判断力は悟性と理性の能力とを調和するものであるというのである。しかしこのような能力は果たして悟性や理性とは異なつてそれ等と相並ぶ独立な能力と考えられるであろうか。しかも若し悟性及び理性の能力とは別個の独立的な能力とするならばどのようなようにして悟性と理性とを調和結合し得るのであろうか。ここにカントのアポリアの一つが見出されると思う。これと同様なことは夫々の能力に対応する領域(対象)についても言い得るであろう。自然と自由との領域が夫々別個の原理に基づき独立的に設定されるとすれば第三の領域である芸術は如何にして両者を調和せしめ得るであろうか。自然と自由との領域が二元的に確然と区別されるならば同じ次元の観点よりの第三の領域による結合は考えられないのではないだろうか。しかも芸術を自然と自由との原理の調和においみようということは芸術を具體的全体的に見ないでそれを歪める結果になるのではないだろうか。そのことはカントの自由美と附庸美、崇高性の分析(K. d. U. § 16)の中に一例が見出されるようにも思われる。

このようにして彼の美学の形式主義——それは前に述べたように彼の哲学の根本性格であるが——及び心理的(これは能力にもかかわるが)主観主義は美的芸術の本質を逸するというおそれを含むことになる。その結果はクーン(Helmut Kuhn)によれば、カント美学の偉大な美的原理を表現する理念は心理的なものと思弁的なものとの中間的

無規定性に止まらざるを得なかったということになる。心理的なものと思弁的なものとの中間、若しくは心理的要素の介入は批判哲学の根本前提と矛盾すると考えざるを得ない。従って「理念の感覚的仮象」というような概念は理念の心理的規定とみられる限り批判哲学とは厳密な意味においては相容れないものという外はないであろう。それのみではなく、重要だと思われることは次の点にあると思う。即ち「仮象」はあくまでも仮象であって、それ以上の何物でもない。従って「理念の感覚的仮象」ということは決して理念と現象との綜合の現実的完成を意味するのではない。故にまた理念の世界とは依然として綜合されることはなく、二元的対立は解消されないということになるであろう。

前に一度触れたように「道徳性の優位」が主張される点に於いては自然と自由との領域を同一次元に置くのではなく両者を序列的にみて統一を与えようとするのである。このような考え方は理性の理念の主観的形式によってのみ両者の序列的統一が示されるのであり、批判主義の論理的構造からは導き出されるものではない。しかもこの序列的關係に対して判断力による美は如何なる位置を占めることになるのであろうか。従って「実践理性の優位」の主張もヘーゲルの言うように「現実性のないただ実践理性から演繹されるべき一つの要請 Postulat」にすぎず、その実践的充足は常に無限に押しすすめられる一つの当為として残されるより外はないことになるであろう。

しかし我々はここに一つの重要な意義を見のがしてはならないであろう。即ち、ヘーゲルの和解の可能性が一つの要請として暗示されているということである。勿論、ヘーゲルの要求するような和解はカント的方法によっては到達され得ないであろう。それにもかかわらず和解への方向はカントによって既に示されていたと言ふべきである。後にヘーゲルによって完結的に表現される美の定式「現象における自由」更に、自由が内容的規定をもつことによって

「イデーの感覺的仮象」にまで發展する方向が示されていると考えられるのである。この方向はカント自身の表現「道徳性の象徴としての美」(Die Schönheit als Symbol der Sittlichkeit. K. d. U. § 391)によっても示されるであろう。

ヘーゲルは一方でカントの欠陥を指摘しつつ次のように言うのである。「カントの哲学は芸術美の眞の把握に対する出発点をつくった。なおこの把握はただ必然と自由、特殊と普遍、感性的なものと理性的なものの眞の統一のより高い把握としてのカントの欠陥を超克することによってのみ可能である」。(Hegel: Werke I. S. 84)

(四)

カントによれば趣味判断は認識判断とは異なる。即ち論理的なものではなくて直感的(單的)なものであってその判断の規定根拠は主観的なものに外ならないというのである。(Geschmackurteil ist ästhetisch)しかもこの趣味判断に伴なう満足(Gefallen)はいわゆる無関心の満足であつて快適や善に伴なう満足からは區別される。快適の場合には感官の主観的印象を介して満足が与えられるのであるが、善においては理性を通じての観念によってのみ満足が生まれるのである。従つてまた快適には傾向(Neigung)が属し、善には畏敬(Achtung)が伴なうのであるが、それ等に対して美の場合には喜福(Gunst)が見出されると言われる。(K. d. U. § 5)

第二に趣味判断はその質量上の契機より見られるとき「美は概念なきものであつて普遍的満足の客体として表象されるもの」(ebenda.)と言われる。即ち第一の無関心的満足はただ特殊的個人的に留まるものではなく同時に普遍的でなければならないというのである。第一の無関心的満足は美についての心理的契機でありその限りにおいては一つ

の主観的規定のみを示しているだけである。第二の普遍的満足ということは心理的規定を一步すすめて客観的な美の規定を与えようとするものであるが、このことは一見バウムガルテンの合理主義に還るかのように見えるであろう。カントはむしろそれに反対の立場を採るのであり、そのことは「概念なき普遍性の客体」という表現に示されていると考えられる。即ち概念なき普遍性である限り対象は概念を通じて表象されるのではない。従ってこのような美的普遍性は主観的普遍性とも言い得るであろう。しかし主観的普遍性というような逆説的概念はどのようにして可能になるであろうか。

このアポリアを解決するためにカントはアプリアな「合目的性」の概念を導入するのである。合目的性とは「客体に関しての概念の因果性が合目的性である」(K.d.U.§10) ここで言われている因果性は客体自体の因果関係ではなくて客体の概念即ち表象の因果性と解することが出来る。従ってこの場合因果性はあくまで自然的現象界に見出される機械的因果律ではなくて諸表象の合目的々な関係のうちにある因果性と考えられるであろう。それではこのような合目的性と美とはどんな関係にあるのかというと「主観を同一の状態のうちに維持しようとする意図の表象の因果性の意識がこの場合一般に我々が快とよぶものを表示し、これに反して、不快はその反対の状態へ規定しよう(その表象を遠ざけまたは除こうとする)する根拠を含む表象」(K.d.U.§10) に他ならない。つまり快というのは合目的性の表象——それは主観を同一状態に保持しようとする——の因果性の意識であるということになるであろう。

しかし趣味判断は何等の対象的関心も規定根拠とはしていないし、また、直観的判断であって認識判断ではない。従って、概念的媒介を含まないから、如何なる目的——主観的目的もまた客観的目的も——の表象をも規定根拠とは

なし得ない。故に趣味判断の合目的性は単なる形式的合目的性であり、換言すれば目的のない合目的性ということになるのである。

以上を示されるようにカントの美の分析の対象は無規定的な美一般であり、しかも、美の受容的側面を示す趣味判断がその主要なテーマとなっている。このことに対応して対象の側面では彼の美の考察は、普通一般に言われているように、自然美に向けられる。他面、美には美的芸術が属しており、この面では美の能動的創造的活動が問題となる。カントはこの側面を「天才論」として採り上げているのである。

趣味判断は概念を通じてなされるのではないが、それは一個の判断であってその判定の中に満足が受動的に与えられる。これに対して美的芸術は常に何かを作り出すという一定の意図をもっている。この場合にもしこの意図が一定のきめられた対象の製作ということに向けられるならば、一つの目的についての概念を通じて満足が得られるということになる。このような満足は美的芸術の満足ではなく一定の目的に対応する機械的技術的製作に伴なう知的満足が与えられるに過ぎないということになる。これとは異なつて美的芸術の製作は一定の意図をみだす知的満足を与えるものではないから、この場合の合目的性はたとえ意図的ではあつても（全くの無意図的製作ということはあり得ないであろうから）意図的に見えてはならないという条件を不可欠のものとして含まなければならない。「意図的に見えない」ということは「人為的に見えない」ということであり、つまり、それは自然的であるということに外ならない。従つて、芸術製作については、それが芸術品として作られたものであつても、なお、自然の作品のように見えなければならぬということになるのである。勿論、芸術作品もそれが製作されたものである限りにおいては芸術製作に關しての技術や規則が要求されるのは当然のことである。芸術はこのような諸々の規則に従ふことによって芸術品

と見なされるからである。しかし、これらの諸規則は決して概念的表象として作品に先行しているのではなくて芸術家自身の自然的な情操能力の自由な創作活動によってのみ与えられるのである。このことをカントは次のように言っている。「天才とは芸術に規則を与える天賦の才能 *Talent naturale* である。しかも才能は芸術家が生れながらにしてもっている創造的能力としてそれは自然に属するものであるから、我々は次のように言いあらわし得る。即ち天才とはそれを通じて自然が芸術に規則を与える生来の情操素質 *Gemütsanlage* である」。(K. d. U. S. 207)

このようにして諸々の美的芸術は必然的に天才の芸術とみなされ、天才はその作品に「恰も自然がそうあるように」規則を付与するのである。従って、天才のこのような製作に於いては規則は芸術家の素質であり、それはまた自然的であるということになるであろう。

このような芸術の作品においては規則は主観的合目的性に適合しなければならない。しかも主観的合同的性を規定根拠として含む趣味判断は普遍的でなければならない。それと共に天才の場合の自然的規則も規則と言われる限りにおいては普遍的な意味を持たなければならない。従って問題は一般に主観的合同的性というようなものは如何にして普遍性を要求し得るかということに帰着すると思われる。カントはこれに対して、この場合には我々に与えられる表象の合目的性の単なる形式が概念をはなれて普遍的に伝達されると判定され得るような満足を生み出すのであるという。つまり主観的合目的性の含む普遍性は、趣味判断の可伝達性ということに、しかも、その可伝達性の根拠としての共通感官 *sensus communis* の中に求められるのである。(K. d. U. §40) 言い換えれば趣味判断においてみとめられる普遍的賛同の根拠は主観的な必然性ということの中にあるのであって、そのことは共通感官を前提として客観的に表象されるということになるであろう。

ところでこのようなカントの考え方は主観的合目的性若しくは趣味判断の普遍性を十分に説明し得るものであろうか。第一に可伝達性ということは事実であって原理ではない。むしろ論理的には普遍性ということよりして可伝達性が出て来るのであってその逆ではないであらう。第二に可伝達性の根拠に共通感官を提起してくるのであるが、これは新しい人間の能力の設定であるか若しくは心理主義への接近を意味する以外のものではないであらう。これをカント的に理解するならばの能力分析の方向において美的共通感官という新しい能力の挿入されるものと考え他はないであらう。しかしこれは以上に示したように心理的契機が混入し何としても充分に普遍性を基礎付けるには成功していないように思われる。

以上のようにしてカントの美的分析論は彼の批判哲学一般の構想と同様に能力分析的形式的方向を採っている。と同時に美の分析は可感的自然界と超感的自由界との二極的対立を媒介結合しようとするものに他ならない。従って美の問題はカントにおいては、他の問題と同様に、方法的、体系的観点より採り上げられているものと言い得るであらう。しかもこの方法的、体系的観点の基盤となったものは能力分析、能力の批判ということである。このような全体的構成の上に立つならば各能力、それに基づく原理及びそれぞれに対応する対象領域は並列的孤立的であるという著しい傾向を否定出来ない。従ってカントの意図する現象と自由とを美に於いて結合統一するということは何としても困難であるというより他はない。その上、自然と道德の領域においては夫々固有のアプリアリな原理の基礎の上にたつて客観的普遍性が与えられるのであるが、芸術の領域に於いては客観的普遍性は放棄されて単に主観的普遍性が示されるに留まった。この点に於いて自然と道德との領域と芸術のそれとは原理の上から異質的構造をもっと考えられ

よう。しかも芸術美の主観的普遍性を支えるものは単に可伝達性ということであり、それは共通感官というようにものに帰着せしめられるのである。

しかしながら彼の美学思想の歴史の上においての重要な意義は無視され得ないであろう。というのは彼以前の独逸のバウムガルテンの合理主義美学とムーア、ヒューム等の英国の感覚主義美学との統一として新たな段階に入るからである。ここに我々はカント哲学が大陸の啓蒙的合理主義とイギリスの心理的経験主義との統一という全体的な歴史的性格の一端を見出すことが出来ると思う。

このカント美学の残した問題は二つに要約出来るように思われる。第一は美によるカント的二元論の和解放といふことであり、第二は美の客観的普遍性の根拠づけといふことである。カント以後の美学の発展は第一にはこの二元論的対立を克服しようという先験的観念論から絶対的観念論への移行となる。それと同時にそれは二元論を和解放することの出来なかった主観的形式主義に対する客観的内容主義への移行に他ならない。それと共に主観的普遍性は内容的観点よりして客観性を獲得して来るのである。

人文研究 第二十八輯